

## 「遠き昭和のまぶしい時代…」

2020年9月28日

水中ウォーキング 大西 紀夫

「あの人、この人、あの顔、この顔、みんなどうしているのだろう。酒とタバコと遊びに暮れた、やんちゃな時代の仲間たち。元気であるか、変わりはないか、遠き昭和のまぶしい時代」・・・五木ひろしの「遠い昭和の・・・」の歌詞の1番である。この懐かしき昭和の時代のことを歌ったメロディーを聞いていると、厳しかった戦後の何も無い時代のことを自然と思い出す。ただ貧しかったが近くの人達も似たり寄ったりであった。小学1年生（昭和22年）になった時であったと思うが、うす焼けた集合写真を見てみると、ほとんどが古ぼけた服装をしているが意外と全員が明るくて可愛いのである。田舎だったので食べるものは何とかあった。お米は、ほとんど政府に出していたが、麦はあった。ほとんど毎日、多くの麦に米を少し混ぜて炊いた麦ご飯であった。さつま芋とか野菜類は畑があり作っていたので、そこいらのものを何でも食べていた。そうして飢えをしのいでいた。夏頃になると時には山に入って山桃をむさぼり食べた記憶が鮮明に残っている。

しかし、時代は急激に復興してきた。私の中学時代には九州から就職列車が東京に向けて走っていた。何かまぶしく活気と寂しさが入り混じったものであった。私は1回目の就職は国鉄であった。昭和36年であったが、機関区に配属された。庫内手を経過して、試験と厳しい訓練のあと、当時、日本では最大の蒸気機関車であったD52型の機関助手として勤務していた。山陽本線の幡生と柳井間で貨物列車を牽引していた。思いあって4年で辞めたが、その間、乗務員の専務パス（全国の国鉄無料）を使って、東京に行きたくなり休みを利用して夜行列車に衝動的に飛び乗った、列車の中は混雑していたが何とか座わることが出来た。乗客の話を聞いていると景気のいい話が飛び交っていたことを思い出す。皆さん一夜明けた後、疲れた顔をされていたが、一様に希望のある顔でもあった事も何故か鮮明に残っている。この時期はきっと日本にとっては、まぶしい時代だったのだろう。まだ戦後16年だというのに。

ずっと時代は変遷し現代に至る。平成が終わり令和の時代となった。妻が亡くなり1人になると、無性に昔が懐かしく感じられる。妻とは仲良くもあり、時には喧嘩もしたが超越した58年間を一緒に過ごした。殊に昭和の時代は酒もタバコもやっていたので、冒頭の歌の歌詞は身に沁みる。今はただ、仏前に座して妻が天国に行けるように祈るばかりである。

私は今、幸せだねーと思う。1人になったが、好きな文章は書けるし、殊に水中ウォーキングの仲間たちとは仲良くやれている。もうすぐ80歳の私でも、こんな時代があるのかと感謝一杯の日々を送っている。65歳までは波乱万丈の時であったが、この15年間はやっと自分らしい日常を取り戻した感がある。それにしても、水中ウォーキングは人を活性化する不思議なモノがある。仲間の皆さんと松本インストラクターに感謝しつつ。

——遠き昭和の一人の独り言——